



Title	被災地を棄てる日本での宗教者が目指すべき〈復興〉／〈防災〉を自問する：奥能登ボランティア
Author(s)	佐々木, 美和
Citation	宗教と社会貢献. 2025, 15(2), p. 43-53
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/102819">https://doi.org/10.18910/102819</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 被災地を棄てる日本での宗教者が目指すべき〈復興〉／

### 〈防災〉を自問する

#### —奥能登ボランティア—

佐々木美和\*

SASAKI Miwa

能登はやさしや土までも<sup>(1)</sup>

#### 1. 序<sup>(2)</sup>

豪雨被害後、通りを挟んだ家を含め隣近所一体には隣人が一人もいなくなった。通りに面して家がある。地元のかたの昔ながらの言い方で「朝鮮（半島）側」と呼ぶ日本海を家から望める。潮風が心地よい。被災前と同じそのままに住んでおられるご夫妻を訪問する。地震で家には亀裂が入った。家からたった徒歩3分ほど、百十数メートル先に行くと、見渡す限り、川下から川上にかけて家々が2階の天井まで泥に埋まり、訪問のたびに筆者は言葉が見つからず立ちつくす（2024年11月～2025年4月21日現在）。豪雨から7カ月、乾いた土砂の変わらない光景が目に映る。冒頭のご夫妻の家に向かう際には、車に引かれないよう注意しなければならない。地元のかたが歩くのをお見かけするよりもひっきりなしに4t トラックの工事車両が走る<sup>(3)</sup>。訪問すると、月に1度ほどしかご挨拶できない筆者の顔を見て、筆者を名前で呼んでくださる。ご夫妻のあたたかさが琴線に触れる。

話していると、原発反対・賛成で地元コミュニティが壊れることはなかつたことについて、80歳の夫が述べられた。住民による運動の末、2003年に珠洲原発は建設を「凍結」<sup>(4)</sup>された。今は原発反対運動をしてくれたことに「そぎや（感謝）しとる」と力を込めて仰った。もし原発があったら「完全にアウト」「福島より悪かったかも」と言われる。金沢には「全然」住みた

\* 超教派ブレザレン神戸国際キリスト教会（積極的絶対平和主義派），神戸国際支縁機構・事務局長，カヨ子基金・代表，明舞9条の会・世話人，エラスムス平和研究所，大阪大学社会ソリューションイニシアチブ

くない、子どもの頃からこの空気で育ってるから「ええがいな」、という。会話の途中で、男性はひと呼吸おいて、冒頭の杵歌を呟いた<sup>(5)</sup>。

## 2. 〈ボランティア〉と復興

権威者のルールや法は良心ではない。「良心は法と対峙する場合がある」[深谷 2018]。人命に配慮し基本的な生活のために自発的に動いているはずの救援活動のボランティアは、大衆の認識の中で「不要不急」の域に入ったようだった。ボランティアでなく専門家<sup>(6)</sup>に画一的・一元的に任せればよいといった〈非人間〉化された反応は、「一台の救急車のサイレン」が「チリの一つの町全体のサマリア人的態度を破壊し」〔イリッチ 1979: 17; Illich 1976: 8〕たかのようだった<sup>(7)</sup>。

元旦の発災直後からの能登においては、ボランティアをめぐり政治家や行政の発言が法律のように浸透していた。県と県知事は 1 月 5 日の時点で「能登への不要不急の移動は控えて」「義援物資を持ち込む前にご連絡を！」と、自発性や柔軟さの域が存在しないかのように、SNS 上で発信した。SNS 上の言説は、ネット上で積極的なボランティアの排除に拡大した（『東京新聞』2024 年 3 月 12 日付および参考として宮前 [2024] を参照）。石川県と県知事のことばに被災地への感情移入はかき消され、人間として呼応し駆けつけること（「遊動化のドライブ」〔渥美 2014: 142〕）への「自肅」〔前掲書: 3〕「秩序化のドライブ」〔前掲書: 124〕の席巻を目撃したように思った。災害を前に呻く人々が容易に想像できる一方で、一元的・官僚制的に統率へ従順<sup>(8)</sup>し（あるいは社会学者らが指摘してきたように鍛錬された無能力〔小谷 2022〕を發揮し）苦しみへの想像さえ遮断する空気<sup>(9)</sup>、こうした〈非人間<sup>(10)</sup>化〉〈非人間性〉を暴くことは解放神学の命題となってきたといえる〔栗林 2017; 佐々木 2023〕。「どう乗り越えるのか、どのようにすれば被抑圧者、虐げられた者が自由を掴み取ることができるのか」を探ることは解放神学の要である〔栗林 2017: 34〕。法を超えるボランティアの良心、宗教者の自律性が、この国の今後の被災地の復興を左右するのではと、地震発災後 1 月に能登を訪問すると並行して思わされていた。

神戸国際支縁機構および神戸国際キリスト教会は 1 月 6 日に能登入りした（第 1 次ボランティア。以下、適宜「第〇次」と記載）。第 2 次（1 月 14

日～17日）で筆者は初めて輪島市、珠洲市入りをした。1月15日、16日の2日間で約1000食の炊き出し依頼だった<sup>(11)</sup>。小学校校舎を用いた避難所では、特に60代以上の女性ご高齢者の避難者は、被災した自宅にある畑に早く行きたい様子だった（第3次、2024年2月6日聞き取りおよびフィールドノート、珠洲市野々江町）。

災害基本法第四条の「救助の種類」には「炊き出しその他による食品の給与 及び飲料水の供給」「被服、寝具その他生活必需品の給与」と記される。1カ月以上経過しても、災害基本法の効力はない。お米が炊かれ生鮮野菜が食事に使われているのを過去1カ月で初めて見た被災女性は「ネギなんか初めて見た」と避難所での炊き出しで呟いた（第3次、2024年2月6日、珠洲市野々江町での炊き出しボランティア）。「水汲みのボランティアが欲しい」「私たち被災者なのに」「人権侵害」と23歳の被災女性は普通の生活を送れない被災者の自己犠牲が強制される現状を述べた（同上）。避難所の電気・ガス費用も、市に陳情に行かなければ住民が負担したのではないかと区長は述べた（第4次、2024年3月3～6日、珠洲市三崎町寺家）。独居で被災家屋に住んでおられる80代女性が8月9日まで生活用水、飲用水を水道から享受できず下水も回復しなかった（第12次、2024年11月19日聞き取り、同上）<sup>(12)</sup>。発災直後どころか長期にわたって災害基本法に記される「救助」の形骸化、不履行、人間的配慮の欠落（〈非人間〉性）を否定できない。災害基本法の限界は、過去にも幾度となく繰り返された。災害基本法の適用には、被災者救済のために伴うはずの良心的な迅速さをもった履行、配慮はなかった<sup>(13)</sup>。

地震後からいつまで変わらないのだろうという風景のなか、もう今年はできるかわからないと言及されていたキリコ祭りが実施された。普段は避難先で生活する高校生もはじめ老若男女が集った。筆者は生まれて初めてそのような美しい祭りを見た（第10次、2024年9月15日、同上）。1週間後の9月21日、16河川が氾濫した。独居のご高齢女性宅を中心に、戸別訪問、傾聴を行う。仮設住宅住まいの70代独居女性は、今にも浸水してきそうな濁流を見つめ怯えながら仮設で在宅避難をした（第11次、2024年9月29日、珠洲市三崎町栗津口）。逃げたくても逃げられなかった。

豪雨から2カ月、地元漁師の区長とともに豪雨被災地へ向かった。区長は「いつまでたっても道路直らんねえ」と述べられた。続けて区長は仰った。

今じゃあ能登はいいよみたいな

「誰かの殿様が能登は要らんと言った。」「能登一国は要らんと。」「（今の）政府ももう能登はほっとけやみたいな」「経済が回らんところはほっとけみたいな」そのような雰囲気が感じられると区長は思っておられた（第 12 次、2024 年 11 月 19 日フィールドノート）。

被災地を棄てる損得勘定・経済至上主義、〈非人間〉性を指摘した区長に、春、わかめの干し方を見せていただいた。区長ご夫妻と近隣一帯の漁師のかたがたにとっては恒例行事だった。区長ご夫妻は、筆者ら神戸国際支縁機構のボランティアに雪国の暮らし、効率優先の技術でなく有機的な材料のみで手製された本物の蓑などの道具、採れたてのわかめの干し方を、素人の筆者らボランティアメンバーに、親切に、丁寧に説明し、見せてくださった。筆者が東北被災地でいただいた塩蔵わかめの話をした。東北のわかめと、寺家のわかめの保存法の違いについて、東北の人は賢いですよ、と区長はやさしい口調でにこやかに仰った（第 16 次、2025 年 4 月 21 日、珠洲市三崎町寺家）。

地震と津波で被災した区長らはかつて、珠洲原発建設の話が持ち上がった際、住民を挙げて反対運動を展開した。2003 年、原発建設計画は停止した。かつて原発へ賛成派だった住民の口からは、過去の運動について、感謝の言葉しか耳にしない（第 15、17 次、2025 年 2 月 17～18 日、7 月 14 日）。現在、かつての賛成派反対派に分け隔てなく交流がある。「楽しかったですよ」と反対運動を回顧するたびに区長は目をきらめかせて、ほほ笑みながら仰る。解放神学の視座からみると、奥能登の方々は〈非人間〉化されない、「いのちを選べ」の視座に立った<sup>(14)</sup>防災／復興の哲学を素で生きておられる。その素の生き方の途上で、土地と生きる智慧を体現されながら重要な警鐘を鳴らし続けてこられたと思わざるをえない。

### 3. 「いのちを選べ」の視座に立つ防災／復興

金沢のような都会には「全然」行く気が起こらず、「能登はやさしや」と被災宅に残るご夫妻（第 15 次）、避難先からも自宅のみでなく畠に行きた

くてたまらないご高齢の避難者（第3次）の他にも、自然があるからなんとなく気分が違う、と、避難先の金沢から戻ってきた女性（第14次）、仮設があるものの豪雨後に郵便が届かないままの半壊の自宅から畠に通い、自宅近くの世界遺産である白米千枚田の田圃も保持し続けるご家族（第13次）など、能登の土との有機的な関係性を持つ方々と、筆者は奥能登で出合わせていただいてきている。言語化しにくく「捉えきれない」、「能登の暮らしのもっと奥にあるもの」と誰かが述べたもの〔田中 2024: 96〕<sup>(15)</sup>、奥能登を蹂躪し、奥能登のひとと土を看過し続けるならば、石が叫びだすだろう（ハバクク 2章 11節、ルカ 19章 40節）〔佐々木 2023: 14〕。

解放神学的な視座からすると、土を「やさし」とうたい、有機的な関係性を生きる奥能登の方々こそが、田中正造が谷中の人々に見た神の側に近い姿に重なる〔田中 1989: 68, 72; 佐々木 2023: 11〕。「人の尊きハ万事万物ニ反キソコナワズ、元氣正しく孤立せざるにあり」<sup>(16)</sup>。奥能登の方々こそが、原発という技術においても、「いのちを選」ぶ解放的防災を既に行動で示しておられた。復興と地続きである「いのちを選」ぶ防災の実践について、宗教者は世と自身に問うてきたか<sup>(17)</sup>。

## 註

- (1) このうたは「杵歌」〔日置 1934〕として元禄時代にはすでに認識されていたことが浅加久敬（浅香山井）に書き残されている。杵歌はいわゆる労働歌、「労作歌」と理解されている〔西山 2003: 30〕。浅加は「能登はやさしやつちまでも」と書き記した〔日置 1934〕。浅加が書き残した当初は「つち」と平仮名表記であり、「土」として理解されるようになったといえる。参照元として、元禄時代の浅加による記述が最も古いとされる（レファレンス協同データベース、[https://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref\\_view&id=1000190040](https://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref_view&id=1000190040)、2025年4月25日アクセス）。
- (2) 本稿は、2024年1月1日に発災した能登半島地震（神戸国際支縁機構では「1.1大震災」と表記することがある）の活動について「宗教者からの報告を」と提案賜わり筆者が作成した内容に対して、原稿化に伴い、本稿の「序」部分などの加筆修正を加えた。2025年1月24日での本稿原案の口頭発表後、能登における2024年9月の豪雨被害から半年余りが経過した2025年2月18日と2025年4月21日に、また、2025年7月14日に、神戸国際支縁機構の第15次、第16次、第17次能登ボランティアで再訪した内容を追記している。
- (3) これら「バベルの塔」のように繰り返される日本各被災地での同様の状況について後述、および佐々木〔2023〕の特に13頁以降を参照。

- (4) 計画の凍結 (<https://www.kepco.co.jp/corporate/pr/2003/1205-1j.html>) と主要経緯 ([https://www.kepco.co.jp/corporate/pr/2003/1205-1\\_1j.html](https://www.kepco.co.jp/corporate/pr/2003/1205-1_1j.html)、2025年4月30日アクセス) について電力会社三社のうち関西電力のプレスリリースを参照できる。
- (5) 第15次、2025年2月18日フィールドノート。
- (6) 被災者の救出は自衛隊や警察などの〈専門家〉への連絡後も助けが来ない〔毎日新聞2024a〕)、人手の足りない状況のなか〈専門家〉から後回しになったのち普段から関係性を持つ知人たちの情報により消息がわかる〔朝日新聞2024〕、〈専門家〉側の情報収集が追いつかない〔毎日新聞2024b〕様子が被災者の体験や報道で指摘されている。福岡県警の編成した援助隊の事例では、〈専門家〉側である県警の情報収集が追いつかず避難所での聞き取りをしたことで124時間経過後に救助に至ったケースが報道された〔同上〕。
- (7) これらは、筆者が「カヨ子基金」の海外ボランティア（スペイン・バレンシア、シリア、ミャンマー）で見た有機的な主体性、ボランティアの姿勢と真逆のものだった（参考として朝日新聞〔2024b〕、『神戸新聞』2025年2月21日付（神戸新聞NEXT〔2025〕）、文化時報〔2025〕参照）。ボランティアの実践を主導していた活動家シリア古都アレッポ出身ナタリー・バヘードさん（29）から、被災地に対してうまれる規制に日本人が思考なく従順する姿について、「それはまるで dehumanized ではないか」と日本社会の〈非人間性〉として即座に指摘されたことがある（第8次シリアボランティア、2024年12月31日、フィールドノート）。日本における自衛隊の限界を前註でも参照した。シリアなど他国でも「災害救助隊」の機能不全が指摘されている〔森2024: 14〕（森は特にシリアの「形成途上」〔森2024: 12〕、厳しい地震後の「復興途上」〔森2024: 14〕についてシリア北部クルド民族の抵抗闘争とアナキズムからまとめた）。翻つて市民の助け合いが決して非力ではないという事実（たとえば阪神淡路大震災の倒壊建造物から助けられた77%が近隣住民であったと考えられること〔河田1997: 8〕）はボランティアとの文脈において今後も看過されるべきではないだろう。シリアでの実践は「非人間」から私たちを「真人間」にしてくれる契機となろう〔森2024: 14〕。権威者発信の秩序化のドライブに取り込まれなかった主体性と自立性を持ったボランティア、痛めつけられる側に感情移入し主体的に動くことのできたボランティアの一部が宗教者だったかもしれない。一方で自衛隊顔負けの指揮と実力を持つ一方で、秩序化のドライブに忠実に従い、引き返した宗教者組織についても見聞きした（2024年1月24日記録）。
- (8) このような従順について筆者が全体主義の起源を連想することは筆者の思い過ごしでありたいが「論理的推論の能力」〔アーレント 1974=2013: 322; Arendt1951=1973: 477〕が首尾よく一貫して効率よく遂行されるような、まるで「テロル」による「運動法則」〔アーレント 1974=2013: 306; Arendt1951=1973: 468〕の実現のような従順はヒットラー政権下において独裁政治、戦争、非思考性と非人間性の獲得に大いに役立った。日本をまとう現代の従順な空気は新しい戦前において戦争へ向けて大いに役立つだろう。本註と関係する内容を佐々木〔2025〕でも指摘した。
- (9) 宮前・大門・渥美〔2025: 3〕においても「社会的風潮」について指摘されている。

- (10) 栗林 [2017: 34] による「現代の非人間性」の指摘やエリュール [1976] が述べたような解放神学の命題における語として〈非人間〉という表現を踏襲した（たとえばエリュールによる非人間化の表現については Ellul [1990: 574-575]）。動物と人間の二項対立比較における人間優位を主張するものではない。
- (11) 炊き出しの様子は毎日新聞 [2024c] を参照できる。筆者を含め神戸国際支縁機構の参加者は 500 食や 1000 食の炊き出しの未経験者が半数以上だった。神戸国際支縁機構のボランティアは、資格や専門性はいらないとしばしば発信し、ボランティアを、誰でもが、感情移入して応答する行動と捉える。神戸国際支縁機構では「復興はハコモノでなく新たなご縁」と理解し、ボランティアの 3 本柱として対話性、無償性、自発性をしばしば挙げる。被災されたかたがたにお会いし対話を持つことはボランティアの柱であり、すなわち災害研究などで使用されるフェーズとは無関係に、常に対話性、〈傾聴〉の姿勢を取る。被災地での感情移入や傾聴はご縁のはじまりであるとともに誰でもできるボランティアと理解し資格至上主義に警鐘を鳴らす。阪神淡路大震災にて精神科医の視点から行動し記録した安は、たとえば感情移入により遠くから駆けつけるといったことによる被災者が感じる支えについて〔安 1996: 26-27〕、また傾聴について述べる〔前掲書: 73〕。神戸国際支援機構は、本文で参照したサイレンにより殺される良心の反応、素人が現場に駆けつけるボランティアの道を実践するよう心がけているといえる。資格を持つ専門家が、ただたどたどしく応答し自問する状況〔前掲書: 91〕、ただ傾聴しかできないと吐露した現実〔前掲書: 73〕や誰もができるボランティア（高額専門医療と異なって癒し（「手当て」〔佐々木 2023: 11〕）が必要なところへの癒いやし（ルカ 9 章 11 節）も関連する可能性がある）について安 [1996: 257-259] を参照できる。本文内で言及した「暮らし」やその奥にある奥能登の温かさのようなものに関連して、現日本の被災地でのつながりや暮らしの失われやすさ、失わせる要因としての社会や構造、都市中心・経済至上の「会社人間」〔前掲書: 254〕などに言及しつつすでに安が阪神淡路大震災での観察から指摘している〔前掲書: 246-254〕。震災における民族差別を含むマイノリティへの社会的差別についても安〔前掲書: 254-259〕は指摘している。
- (12) 発災後から 8 カ月が経過した 8 月 7 日付の報告を最後に石川県広報では「被害報告」の更新が終了した。停電・断水の被害状況報告欄の記載がなかった。
- (13) 官僚主義の采配する申請主義を中心にし、災害基本法には良心的配慮も実効性もないといえないか。すでに明治の時代に「官吏」が「救済人」となることを「被害民」は喜ばなかつたと田中正造は記す〔田中正造全集編纂会編 1979: 456〕。「救済人官吏たれが被害民喜べず。救済人の手より貰ふを喜ぶ。慈善家の手ハ神の手の如シ。官吏の手より来る食物、囚人の食の如シ。囚人ハ捕へし人より食をうく。被害民を造くれる官吏の手ハ鬼の手の如シ。被害を造り、被害を救ふ。不条理の極くなり」〔前掲書〕。現状をみると被災者本位の支援、良心的配慮が即現実化する、災害基本法が即座に実効化されるよりも、運動法則がテロルの下で即座に現実となるほうが容易いのかとすら思われる〔アーレント 1974=2013: 306; Arendt1951=1973: 468〕。いや、註 8 でも参照したように、日本国家が既に全体主義性の特徴を帶びているから、演繹などの論理性を行動原理

とする統治形式に支配され、強制され、思考は放棄され、テロルに近い暴威を奮っているのだろう [アーレント 1974=2013: 31; Arendt1951=1973: 473-474]。人を人とも、いのちをいのちとも思わない非人間性的支配が [Arendt1951=1973: 473] 災害基本法を無効化するのだろう。官僚性は例に挙げるまでもない。「論理的推論の能力」 [アーレント 1974=2013: 322; Arendt1951=1973: 477] を發揮し強い意志を持って 2+2=4 といった〈眞実〉を論理展開することを重視し自ら積極的に行動原理とすることで思考をはぐ奪された人間が歯車となり、全体主義への準備は整っている [Arendt1951=1973: 473]。ボランティアは、強制的推論の下で実現する力（参考（既出）：秩序化のドライブ）とは逆志向の、この国の全体主義的傾向を壊す、最も自由な活動としての思考を取り戻す〈あらたなはじまり〉 [前掲書: 473, 478-479; 佐々木 2024b: 27] といえる可能性があるだろう。

- (14) 聖書の「いのちを選べ」（申命記 30 章 19 節）から。解放神学として栗林 [2017: 237] がまとめている。本原稿中で用いる聖書箇所は、すべての引用文を、聖書協会共同訳（2018 年日本聖書協会発行）から用いた。
- (15) 能登のかたがたについて、2007 年の地震から能登にかかる北陸学院大学の田中純一が言語化しようと試みている。田中 [2024: 96] は、「能登全体」の人たちについて、「海」、「土」、「先祖」などと「多層なつながり」「かかわり」を持つ世話（ケア）の積み重なりを捉えた。田中は次のように述べている。家一つを取り上げてみても、彼らにとり能登の家は、単に「住宅」なのではない [前掲書]。「僕らのような都市住民生活は、その多くが市場経済システムに回収されてしまっていて、薄っぺらい。片や、能登の人たちは海とのかかわり、山とのかかわり、畑とのかかわり、集落の人との関わりを通じて世話（ケア）する対象がたくさんあるんです。世話をしたり、世話されたり、が多層にあって、それが生活の中に積み重なり、彼らの日常になっている。単に住宅に戻るという視点のみで捉えてはいけない。効率性や合理性、あるいは計算可能性とか、僕らが馴染んできた価値尺度で能登の暮らしは捉えきれないと思います。暮らしのもっと奥にあるものを丁寧に見つめなければいけない。復興計画も、いま話したような視点、住民の思いを踏まえたものにしないと住民が住めなくなる、住みたくないくなる」おそれがあるという。阪神淡路大震災の精神科医は、専門家による精神的ケアでなく、広い空の下での浜辺での散歩が、あるひとへ癒やしのようなものをもたらした記録を残している [安 1996: 101-102]。日本国内で大地、土地、〈自然〉との深く長い〈共生〉関係を有する人々については、現代まで抑圧される歴史を持つアイヌ民族のかたがたなどもおられ、それらの指摘も看過すべきではない [宇梶 2022; 佐々木 2023: 16]。
- (16) 田中正造の明治 44 年 5 月の日記に記されたとされる [田中正造全集編纂会編 1978: 189]。
- (17) 奥能登の生んだ哲学者西田幾多郎は関東大震災を経た大正時代に、日本社会に対する批判を行っている。「深く考えて大なる計画を立てる」とこと、「有機的統一」の不足を指摘した [上田編 2004: 159]。現代まで続く日本社会の防災における欠落といえるのではないか。早い段階から島薗 [2012; 2013] は原発批判の根拠を宗教倫理的な観点（仏教）から整理した。しかし価値基準／宗教的倫理

観自体を問う・考察するなどメタ的視点、倫理と接続される可能性のある宗教的啓典からの参照を含める哲学・宗教学・神学的なアプローチの議論は、特に実践的な接続まで含めた議論において余地があると思われる〔芦名 1997; 2007: 292; 栗林 2017: 201; 佐々木 2023: 12-13〕。西田が述べた「有機的統一」の視点は、現代日本社会の災害・防災・復興研究においても欠落しているように思われる。復興（防災の未来）、防災（復興の過去）といった側面での有機的な連関性の欠如などについて宗教哲学・神学的視角から思考を試みてきたものが本稿のベースの一部となっている〔佐々木 2024a〕。

## 参考文献

- アーレント、ハナ 1974=2013 『全体主義の起源 3』 みすず書房。  
Arendt, Hannah 1951=1973 "The Origins of Totalitarianism"  
<https://social-ecology.org/wp/wp-content/uploads/2024/03/Hannah-Arendt-The-Origins-of-Totalitarianism-Harcourt-Brace-Jovanovich-1973.pdf>(2025年7月18日アクセス)
- 朝日新聞 2024a 「『娘です。拡散お願いします』 母が生き埋め、X で情報集めた18歳」 2024年1月25日付、  
<https://www.asahi.com/articles/ASS1S6K8SS1RUTIL005.html> (2025年8月10日アクセス)
- 2024b 「スペイン洪水ボランティア、能登との違い 神戸国際支縁機構が報告」 2024年12月18日付、  
<https://www.asahi.com/articles/ASSDK3SN2SDKPIHB00RM.html> (2025年8月10日アクセス)
- 安克昌 1996 『心の傷を癒すということ 神戸—365日』 作品社。
- 芦名定道 1997 「発題 1 環境問題とキリスト教思想」『日本の神学』36: 101-108。  
—— 2007 『自然神学再考』 晃洋書房。
- 渥美公秀 2014 『災害ボランティア』 弘文堂。
- 石川県「目的別・令和6年(2024年)能登半島地震に関する情報(復旧・復興本部、災害対策本部)」 <https://www.pref.ishikawa.lg.jp/saigai/202401jishintaisakuhonbu.html#higai> (2025年8月10日アクセス)
- イリッチ、イヴァン 1979 『脱病院化社会 医療の限界』 晶文社。
- Illich, Ivan 1976 "Medical Nemesis The Expropriation of Health" PANTHEON BOOKS A Division of Random House, New York.  
[https://www.columbia.edu/itc/hs/pubhealth/rosner/g8965/client\\_edit/readings/week\\_2/illich.pdf](https://www.columbia.edu/itc/hs/pubhealth/rosner/g8965/client_edit/readings/week_2/illich.pdf) (2025年7月18日アクセス)
- 上田閑照編 2004 『西田幾多郎隨筆集』 岩波書店。
- 宇梶静江 2022 『アイヌ力よ！ 次世代へのメッセージ』 藤原書店。
- エリュール、ジャック 1976 『エリュール著作集 2 技術社会 下』 すぐ書房。

Ellul, Jacques 1990 "LA TECHNIQUE ou l'enjeu du siècle"

<https://archive.org/details/technique-ou-lenjeu-du-siecle-la-jacques-ellul> (2025年7月18日アクセス)

河田恵昭 1997 「大規模地震災害による人的被害の予測(阪神・淡路大震災<特集>)」

『自然災害科学 = Journal of Japan Society for Natural Disaster Science』1: 3-13.  
<https://cir.nii.ac.jp/crid/1520009410208876416> (2025年9月22日アクセス)

栗林輝夫(著) 西原廉太・大宮有博(編) 2017 『栗林輝夫セレクション1 日本で神学する』新教出版社。

神戸新聞 NEXT 2025 「爆撃、銃撃で傷ついたシリアで『宗教や民族問わず団結、若者らの姿目立った』 復興ボランティアが神戸で報告」 <https://www.kobe-np.co.jp/news/society/202502/0018669982.shtml> (2025年8月10日アクセス)

小谷敏 2022 「日本の訓練された無能力 :「後ろ向きにしか進めない国」をめぐる覚書」『人間関係学研究 : 社会学社会心理学人間福祉学 : 大妻女子大学人間関係学部紀要』23: 95-107。 <https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/7266> (2025年7月9日アクセス)。

佐々木美和 2023 「<書評>栗林輝夫(著) 西原廉太・大宮有博(編)『栗林輝夫セレクション1 日本で神学する』『災害と共生』6(2): 7-19。

——— 2024a 「日本における災害・復興・防災・ボランティア—宗教者との実践からの一試論—」宗教社会学研究会 (2024年7月20日、瓦木公民館)。

——— 2024b 「6. おわりに」『未来共生セミナー volume22 生きることばを紡ぐ』大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター / 未来共生プログラム、27-28。

——— 2025 「法の下でなく法の基を目指せるか」『9条明舞の会ニュース』みんなで考える9条・明舞の会(9条明舞の会)35:1-2 (2025年5月26日発行)。

島薙進 2012 『低線量被曝のモラル』河出書房新社。

——— 2013 「福島原発災害後の宗教界の原発批判 : 科学・技術を批判する倫理的根拠」『日本宗教学会』87(2): 107-128。

田中正造 1989 『田中正造選集〈六〉神と自然』岩波書店。

田中正造全集編纂会編 1978 『田中正造全集 第十二卷』岩波書店。

——— 1979 『田中正造全集 第十一卷』岩波書店。

田中純一 2024 「インタビュー『被害の不平等性』に着目し、被災者一人一人に寄り添った丁寧な救済制度を訴える」『能登』55、94-96。

東京新聞 2024 「能登の災害ボランティアが足りない 志願者のやる気をくじいた要因の数々 被災地入り『自粛論』の的外れ」

<https://www.tokyo-np.co.jp/article/314568> (2025年7月25日アクセス)

- 西山郷史 2003 「①ふうど お国ぶり—能登はやさしや土までも—」『能登のくに刊行会』北國新聞社。
- 日置護校訂 1934 『能登路の旅 続』石川県図書館協会 国立国会図書館デジタルコレクション。<https://dl.ndl.go.jp/pid/1226241> (2025年4月26日アクセス)
- 深谷格 2018 「法と良心」『良心学入門』岩波書店、44-53。
- 文化時報 2025 「ミャンマー地震を報告」(2025年7月25日付)
- 毎日新聞 2024a 「ひとりぼっちになってしまふ 50年連れ添った妻はまだがれきの下」2024年1月4日付、  
<https://mainichi.jp/articles/20240104/k00/00m/040/231000c> (2025年8月10日アクセス)
- 2024b 「『124時間ぶり救出』地道な聞き取りが端緒 派遣隊員振り返る」  
2024年1月10日付、<https://mainichi.jp/articles/20240110/k00/00m/040/311000c> (2025年8月10日アクセス)
- 2024c 「能登半島地震 神戸から恩返し 輪島で炊き出し」2024年1月17日付、<https://mainichi.jp/articles/20240117/ddn/041/040/006000c> (2025年8月10日アクセス)
- 宮前良平 2024 「令和6年能登半島地震発災初期におけるXでのボランティア言説の検討」『自然災害科学』43(3): 551-560。[https://doi.org/10.24762/jndsj.43.3\\_551](https://doi.org/10.24762/jndsj.43.3_551) (2025年7月18日アクセス)
- 宮前良平・大門大朗・渥美公秀 2025 「令和6年能登半島地震における「ボランティア不足」とは何だったか：災害ボランティアセンター運営と自粛要請に着目して」『災害と共生』8(1): 3-20。<https://doi.org/10.18910/98898> (2025年4月30日アクセス)
- 森元斎 2024 「社会は転倒しなければならない——ロジャヴァ革命とCHAZによる反暴力」森元斎編『思想としてのアナキズム』以文社、3-20。